

『深い河』－ 遠藤周作の再発見

ヴェベル・ミハエル*

はじめに

2016年にマーティン・スコセッシによって監督された『沈黙－サイレンス－』という映画は世界中で、特に日本における日本史で注目を浴びた。だが、その『沈黙』の原作は1966年に書き下ろされたとは思えない内容かもしれない。正確にはその40年後その真剣なストーリーを二度も生かし、大成功できたのは当然のことではない。つまり、1971年に一度映画化されたことがあるものの、今回の映画化が2000年以降の遠藤周作の作品評価に最も影響したという意味である。その成功の影響で遠藤周作の他の作品も世人の注目の的となった。言い換えれば、遠藤周作の作品が再発見されたということである。

上述の2016年の映画の成功に関し、遠藤周作の重要な作品がチェコ語など世界中の言語に翻訳されはじめた。例えば、チェコにおいては『沈黙』の再出版(2017)をはじめ、『侍』(2018)、『深い河』(2019)が連続的に翻訳出版されたのである。一度翻訳出版された作品の新訳までできた場合もある(ポーランド語訳『沈黙』など)。20ヶ国以上で翻訳され¹、今世界から注目されている。それは現在のヨーロッパ、あるいは西洋で、なぜ、またどういう意味でそれほどの人気があるか、考察してみた。

1. 現状

ヨーロッパは様々な問題に向かって21世紀に入った。2008年のグローバル経済危機から難民問題を経てイギリスの欧州連合離脱まで様々な問題は、「ヨーロッパ人」あるいは西洋人に対してアイデンティティクライシスを引き起こしたに違いない。そのような環境と雰囲気の中で西洋人として自分の本質を外の目で見るのは普段よりも意味が深いと思う。自分の文化と相違する海外の文化の中で、どのように描かれているのかという視点は、自然に注目を集めている。いうまでもなく、その海外の文化の魅力もあるに違いない。

だが、『沈黙』は文化の対決のテーマをキリスト教の意味合いで提供している。キリスト教は何百年前に西洋から輸出されたものであるが、現在、キリスト教は西洋でかつてのように流行しているとは言えない。歴史上の一つの要素として認識されているが、キリスト教(特にカトリック)信者数は年々に減少しつつある²。要するに現在の発展した物質が豊富な社会においてキリスト教は一般的に時代に遅れたものとして認識されているかもしれない。しかしまたそれに対してキリスト教を自分の歴史や文化の一つのこととして決して無視することができないと思う西洋人は多数だろう。その歴史的な影響で西洋人の性格と本質の一部になったに違いない。

*カレル大学准教授

2. 遠藤周作の出発点

キリスト教信者である遠藤周作は、作家として自らの作品においてもカトリック信仰を表現しようとした。その行為はある意味で宣教師ともいえるかもしれないが、『沈黙』をはじめ『深い河』までバチカンから異端者として批評されてきたのである³。遠藤の信仰についての発言は教義に則った形ではなく、むしろ第一次に置かれ描かれたのは人間である。遠藤周作は自分自身の一生の体験をそれぞれの作品の主人公に投影し、キリスト教をどうにかして自然な形で日本人に伝えようとした。いわばその努力を最後の作品である『深い河』の中で仕上げたと言える。

遠藤周作のキリスト教（カトリック教会）との出会いは12歳の時で、伯母の影響で母親と同時にカトリックの洗礼を受けたのがはじめてである。それまで幼少時代は父親の任務があった満州の大連で過ごしたが、両親の離婚がきっかけになり、母親と帰国した。その後、カトリックの伝統がある神戸市で新しい生活を送り始めた。

1941年に上智大学に入学した（カトリック修道会イエズス会が現在まで運営している）。さらに1950年からフランスに留学をしていた。この留学の間に遠藤の人生最大のテーマとなった問題が初めて発生した⁴。それは「日本人でありながらキリスト教徒である矛盾」であった。遠藤は後年、自分の信仰に関する思索を、「母親に着せられただぶだぶの洋服を和服に仕立て直す作業」と表現していた⁵。このテーマは最後まで貫かれており、晩年の『深い河』へもつながっていく。

3. 『深い河』の世界が表現する深い意味

『深い河』の世俗的な人物の多様性は、『沈黙』よりも様々な読者を引き寄せるに違いない⁶。また、その登場人物は全員日本人であっても、信教がキリスト教に限らないことも重要である。

ストーリーの目的地であるインドのガンジス川は最終的に宗教と信仰に関係なく全員を集約する。これから『深い河』の登場人物を分析し、それらを通して「グローバル化と日本学」という本年度のコンソーシアムのテーマを果たすことができると期待する。そして、主人公だけでなく、『深い河』の小説全体はグローバル化に関係していると思う。登場する国は日本、フランス、ビルマ、インド、4つの国で、舞台は1984年10月下旬のインドに設定されている。それは第6章の頭に記述しているツアーの日程や、インディラ・ガンディー首相の10月31日の暗殺から明確となる。また、この暗殺事件はストーリーのクライマックスの要因もなる。遠藤はインドがカオスの世界だと言い、その国の魅力に引き寄せられた⁷。

一つの小説、一つの場所（インド）で三つの大きな宗教が現れる。『深い河』において記述されているキリスト教（カトリック教会）、仏教とヒンドゥー教はイスラム教とともに世界宗教の一つである。それぞれの国々やその文化の一部である宗教を通じて『深い河』というグローバルな小説ができた。

忘れずに記しておきたいが、小説の題名が『ディープリバー』、つまり『深い河』という黒人霊歌のスピリチュアルにインスパイアされているということである。このような部分もまたこの小説が〈世界〉を象徴する理由になっていると言えるだろう。

「深い川よ、私の故郷はヨルダンのかなたにある。深い川よ、私はお前を越えて、仲間たちの元へと帰りたい。おお、お前もあの福音の宴に行ってみたいとは思わないか？そこでは、すべてのものが平和であることが約束されているという。」⁸

4. 『深い川』の構造と登場人物の多様性

4.1. 13章の構造

小説の構造は13章に分かれ、5人の主人公は各

一章で紹介されている（第1章、第3章、第4章、第5章、第10章）。それらの紹介文章は心理学分析に類似する。その他の章は目的地の紹介で（第6章、第7章、第9章）、ストーリーへの導入（第2章）、その続き（第8章）、クライマックスである（第11章、最後の第13章と「転生」という第11章）。

「まことに彼は我々の病を負い」（第11章）は、「彼が担ったのはわたしたちの病（『イザヤ書』53:2）」、「彼は醜く威厳もなく」（第13章）は、「見るべき面影がなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もない（『イザヤ書』53:2）」といった引用であろう。

4. 2. 5人の主人公とその中に投影された作家像

一人目の主人公である磯辺は、彼の世代に多いごく普通のサラリーマンである。彼の姿には日本社会の特徴一つが見られる。彼は何よりも仕事を優先し、一時は入院するものやがて退院するが、妻に死なれたことが契機となり、その死や生活そのものの意味を求めはじめる。磯辺は典型的な日本人として紹介されているが、遠藤周作自身もまた、自分自身が日本人であるという強い意識があるという表現であろう。

二人目の美津子はボランティアで、磯辺の妻の死ぬ間際を介護する女性として紹介されている。しかし、美津子はむしろ磯辺夫婦よりも、大津という主人公に縁がある。「美津子」という名前には「美しい」の字が使われており、これは大津との運命的な標示として同じ「津」の字が二人の名前に使われているのである。大学生の頃通っていたキリスト教系の大学というのも、元々遠藤周作の母校である上智大学を連想させる。美津子は『深い河』ただ一人の女性主人公である。女性ではあるが、遠藤との類似点も持っている。例えば、遠藤と同じくフランス文学を専攻していることである。美津子はフランソワ・モーリアックの『テレーズ・デスケルウ』（Thérèse Desqueyroux）に基づ

いて自分の勉強も個人的な生活も送っている⁹。

三人目の主人公である沼田は童話作家で、少年期は満州の大連に住んでいたが、両親の離婚で遠藤と同じ年齢に（10歳）本土に帰国することになる。そこは遠藤との類似点が多数ある。キリスト教にあまり触れていないが、沼田の動物への感度と共感の仕方にはカトリック教会の聖アッシジのフランチェスコに非常に似ているものがある¹⁰。

四人目の主人公である木口は戦時中にインパール作戦に参加したことがある。50年後戦友と敵兵達を弔うため、仏教の発祥地であるインドへのツアーに参加するが、ガンジス川の川岸で経文を唱えることになる。他宗教の融合の点から見れば、木口が重要な登場人物である。いうまでもなく第二次世界大戦に青春を奪われた世代の代表者としても特別な役割と意味がある。

最後に五人目の主人公である大津はカトリック信者としての遠藤周作を映す鏡であると言える。大津は自分を愛してくれた母親の影響で子供の頃クリスチャンになったが、成人になる前母に死なれてしまう。だぶだぶの背広に象徴される幼いころに背負ったキリスト教を捨てるか守るかの葛藤と戦った末、ようやく大津は神父になる道を歩き出す。一方、現実の世界で遠藤は大津と同年代の頃にカトリック作家になる道を選んだ。キリスト教を自分の作品のテーマにした遠藤は、その教義の表現が「正義」ではないとの悪評をカトリック教会から受けていた。小説で勝手な人物として描かれている大津は、ヨーロッパの神学院とインドのカトリック修道院から追い出されてしまう。大津は美津子への手紙のなかで（第6章）次のように書いている。

「少年の時から、母を通してぼくがただひとつ信じることのできたのは、母のぬくもりでした。母の握ってくれた手のぬくもり、抱いてくれた時の体のぬくもり、愛のぬくもり…」 「母はぼくにもあなたのおっしゃる玉ねぎの話をいつもしてくれましたが、その時、玉ねぎとはこのぬくもりの

もっと、もっと強い塊り － つまり愛そのものなのだと教えてくれました。』¹¹

大津は神への愛を母性愛と比較する。「母なる神」も遠藤文学の研究者がいうものである¹²。大津が表している気持ちはおそらく遠藤自身のものである。ヨーロッパ人の信仰の概念についても同様だろう。

「五年に近い異国の生活で、ヨーロッパの考え方はあまりに明晰で、あまりに論理的だと感服せざるをえませんでした。そのあまりに明晰で、あまりに論理的なために、東洋人のぼくにはなにかが見落とされているように見え、従っていけなかったのです。』¹³

「こんな話が日本人のあなたにはつまらなく縁遠いことはよく知っています。知っていながら、今晚、真夜中まで書いたことを許してください。でもぼくは誰かに語りたくって仕方がなかったんです。』¹⁴

大津はようやくインドで最貧の人々に仕え、それらの死体を運び、火葬し、ガンジス川に流す仕事をしている。そこでイエス・キリストの受難との共通点が見える。やがてある日、他人の罪を背負い、キリストのように殉教を望み始めるのである。

4. 3. 主人公5人の共通点とそれらの旅の目的

やがて五人の主人公全員は人生と死の意味を求めてインドへ向かう。全員とも親しい人の死に関わった経験がある。また、全員が自分が入院したり、他人を見舞うなどの形で病院とも関係があった。作者の遠藤周作はこれら主人公たちの全員に自分の疑惑や、個性、体験、また、自分の世代の悩みを投影したのである。主人公たちはそれぞれの理由を抱いてインドのツアーに参加する。そして、主人公たちの結末は次のようであった。

結局、磯部は生まれ変わった妻に会えなかった。また、美津子は大津に出会った。沼田は九官鳥一羽を手に入れ、放してやった。木口は結局一人で

ガンジス川の川岸で経文を唱えた。大津はツアーに関係なくずいぶん前にインドへ来ていたが、その前にフランスから美津子に書いた手紙には「夜、作業を終えて、きらめく星を見ていると、時としてあの方がぼくを何処に連れていかれるのか、怖しくなる時もあります。』¹⁵というところもある。ガンジスの川岸にヒンドゥー教徒から暴力を受け、入院する。その後の大津の消息は不明である。

ガンジス川は、どんな人間も、生き物も、植物も、生きている者も、死を迎えた者も、みんな同じように受け入れ、運んでいく。ガンジス川はついに宗教と信仰に関係なく全員を集約する。ガンジス川の流れに皆が飲み込まれていく。そう考えれば、ガンジス川は宗教的なグローバル化の可能性を標示しながら、そのグローバル化の象徴となっている。信仰はどれでも、人間の希望は一緒だと。

5. グローバル的な宣教師として

日本人として日本人にキリスト教を伝える努力を目指していた遠藤はイエス・キリストの人格を強調したかったのであろう。さらに、そのキリストという人間を通して、キリスト教の人間らしさを伝えようとさえしたのではないだろうか。つまり、遠藤はグローバル的な宣教の形を実施したのである。彼は15・16世紀の東洋と南アメリカ大陸進出に伴うカトリック宣教経済や権力関係に反対していた。遠藤によると、その歴史にあった暴力的とも言える宣教方法のせいでキリスト教は現代までそれぞれの文化のものではなく、外のものとして扱われるようになったとその作品を通じていう。

人間というものは何よりもまず宗教的な存在であると遠藤はジョン・ヒック¹⁶に同意する。ヒックの『宗教多元主義：宗教理解のパラダイム変換』¹⁷は多数の思想家に影響を与え、遠藤周作にも与えた。『深い河』には宗教多元論の影響が認め

られるし、遠藤自身も『深い河創作日記』の中でヒックの著作に影響を受けたことを記している¹⁸。

遠藤はあらゆる国、文化、宗教、つまりどのような背景を持つ人間でも、信仰というものをもつはずだと言う¹⁹。その信仰は世界中の人々の心も根本的には同じであるからだというのである。それをグローバルと呼ばずして、何と呼ぼう。

『深い河』はキリスト教徒でありながら日本人作家である遠藤周作の最も深い信仰告白であると言える。彼の晩年の作品とも言われる『深い河』は、その一生に存在していた日本人でありながら、キリスト教徒であるという矛盾とも言える悩みの自白である。また、そのだぶだぶの背広の最後の清算だったと言える。

おわりに

本論文は現代のグローバル化は単に文化の領域だけではなく、信仰の面においても進んでいるのではないかという推測に基づいた。とはいえ、様々な信仰や宗派は必ずしもグローバル化のようにスムーズに進歩しているとは言えない。つまり、経済的、文化的なグローバル化と違い、世界の宗教は対立し、いわば単一的な「グローバル信仰」には合併できないという意味である。グローバル化と共に非宗教論理が特に西洋で広がっているが²⁰、それでもなお、人間というものは何よりもまず宗教的な存在であると遠藤はその終生の作品の中で表現し、自身の人生もまた生き抜いたのである。マーティン・スコセッシの2016年の映画、また最近の様々な言語へ新しく訳された『深い河』などその他の遠藤周作の作品に対するこのような評価は、なおこの問題や疑問が、世界中で社会の風潮を反映しているという証拠ではないかと思う。

注

- 1 <http://netradio.febcjp.com/2017/03/18/>
- 2 ピュー研究所 (Pew Research Center) のデータによるとヨーロッパにおけるキリスト教徒数は2010年と2015年の間に560万人減少したことがわかる。
- 3 Williams, Mark. *Crossing the Deep River: Endō Shūsaku and the Problem of Religious Pluralism*.
- 4 遠藤周作『白い人・黄色い人』(1955)
- 5 Inoue, Masamichi. *Reclaiming the Universal: Intercultural Subjectivity in the Life and Work of Endō Shūsaku*.
- 6 『沈黙』の歴史的なテーマはある意味で読者と登場人物の間に距離を置くだろう。主人公である近代カトリック神父と宣教師のイメージも現実の現在世界から離れている。
- 7 遠藤周作『深い河を探る』(1994) 文芸春秋 p. 11, 19
- 8 [https://en.wikipedia.org/wiki/Deep_River_\(song\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Deep_River_(song))
- 9 フランソワ・モーリアック (1885-1970) もカトリック作家で、1952年にノーベル賞を受賞した(遠藤のフランス留学期間中)。遠藤はこのモーリアックの作品を詳しく研究し、ついにそれを『深い河』で間テクスト性を適用しながら言及する。
- 10 聖アッシジのフランチェスコ (1182-1226) はイタリアのアッシジに生まれ、フランシスコ会の創始者である。伝説によると動物と話せたことがある。
- 11 遠藤周作『深い河』(1993) 講談社 p. 188
- 12 中山寛治『母なる神を求めて—遠藤周作の世界展』(1999) アートデイズ
- 13 遠藤周作『深い河』(1993) 講談社 p. 186
- 14 遠藤周作『深い河』(1993) 講談社 p. 195 (太字は著者)
- 15 遠藤周作『深い河』(1993) 講談社 p. 189
- 16 John Hick (1922-2012) キリスト教徒の哲学者。宗教、信仰、文化、伝統の因果関係を考察し、宗教多元主義論を発展した。様々な世界文化と地域による伝統が根拠になり、どのような信教を持つかという点に影響を与えるという概念である。それぞれの宗教の信仰はどれも最終的には救済につながるという。このヒックの思想概念は主人公の大津の手紙においても読むことができる。
- 17 *Problems of Religious Pluralism*, 1985 (邦訳: 間瀬啓允訳、『宗教多元主義: 宗教理解のパラダイム変換』、法蔵館、1990年、ISBN 483187180X)
- 18 遠藤周作『深い河創作日記』(2016) 講談社文芸文庫
- 19 Williams, Mark. *Crossing the Deep River: Endō Shūsaku and the Problem of Religious Pluralism*.

- 20 Zuckerman, Phil (ed.). *Atheism and Secularity*. *Abc Clío*, 2009., Plüss, Caroline. *Migration and the Globalization of Religion*. In Clarke, Peter. B. (ed.). *The Oxford Handbook of the Sociology of Religion*, 2011.

参考文献

- 遠藤周作『深い河』（1993）講談社
遠藤周作『深い河を探る』（1994）文芸春秋
遠藤周作『深い河創作日記』（2016）講談社文芸文庫
『遠藤周作文学全集』（1999）新潮社
Inoue, Masamichi. *Reclaiming the Universal: Intercultural Subjectivity in the Life and Work of Endō Shūsaku*. In *Southeast Review of Asian Studies*, Vol. 34, 2012, pp. 153-170.
Netland, John T. *Rewriting the Death of Jesus: An Intertextual Reading of Shūsaku Endō's Deep River*. In *Christian Scholar's Review*, vol. 46, no. 1, 2016, pp. 65-77.
Williams, Mark. *Crossing the Deep River: Endō Shūsaku and the Problem of Religious Pluralism*. In Doak, Kevin M. (ed.). *Xavier's Legacies: Catholicism in Modern Japanese Culture*, pp. 115-33. Vancouver: UBC Press, 2011.